

〔魂の配慮〕

青春の軌跡

池内 功*

私たちは、生きていくなかで、多くの人と出会い、かわりを持ち、やがて別れていきます。出会いの程度は、色々あるかと思いますが、心が通い合い、ともに喜び、ともに泣くほどのかわりがもてた友は、人生の歩みを別々に歩むようになっても、ことにふれて、なつかしく思い、その存在が心の支えともなります。私自身、そのような出会いに支えられて、今があるのだということを感謝して生きております。そこで私は、皆さんに素晴らしい出会いの可能性がある大学生活を送っている今こそ、是非、多くの人々との出会いを実現してほしいと訴えたいと思います。

本日、私は二十八年前のある学生との出会いと別れ、そして彼の仲間たちとの出会いの話をいたします。皆さんが人との出会いを求める上での参考になれば幸いです。

二十七年前の一九八〇年三月二日、人文学科の三年生であった渥美貴文君が亡くなりました。その一週間ほど前の日曜日の早朝、丸亀の県道府中線で自動車の自損事故を起こし、意識不明の重態となり、それから一週間、丸亀労災病院で、いのちは生きようとして戦ったけれども、力尽きたのでした。事故を起こした車は、彼の車で、学年末試験が終つ

た週末、高松近郊の友人の家で徹夜マージャンをした帰りでした。運転していたのは、同じく人文学科三年生の藪下君で、居眠り運転だったのでしょう。道路横のコンクリートの側溝に激突し、藪下君は即死でした。藪下君は、サイクリング部の部長で、控えめでおとなしい学生だった印象が残っています。ご家族がひっそりと遺体を引き取っていったということでした。一方、ゴルフサークルの部長であった渥美君が、一週間、病院で生死の境をさまよっていた間、春休み中にもかかわらず、体育連絡会や人文学科の友人たちが、少しでも役に立とうと献血のために待機したり、大阪から駆けつけられたご家族を支えたりしたのでした。家族以外は病室に入れなかったため、皆は、病室の外で回復を祈って、千羽鶴を折り続け、毎日五百羽の願いの鶴が病室に届けられました。渥美君が亡くなった時、彼の遺体の胸には四千羽ほどの鶴がおかれたのです。

死亡当日の三月二日、遺体は四国学院の今のロゴス館のところにあった学長公宅に移され、お通夜が営まれました。そして翌三月三日、学生会館横の聖恵館で、葬儀が行なわれました。葬儀の司式をされたのは、今年春のキリスト教強調週間の講師で来られた石丸新先生です。当時、人文学科の教授でした。式には大勢の関係者が参列したのですが、後日、大阪のご自宅で行なわれた葬儀にも三十名ほどの学生が参加しました。

渥美君は、私が一九七九年春、四国学院大学に赴任して、初めて教えた専門東洋史の受講生でした。ウィットフォールの中国征服王朝論を英語の原文で読む授業で、学生たちは大変だったろうと思います。勉強の足りない若い教師であった私の背伸びした授業はわかりにくかったはずです。ただ、渥美君は、私に好意を持ってくれたようで、後期の授業が始まって間もなく、研究室を訪ねてきました。彼が創設するゴルフサークルの顧問になってくれたのです。色々話をしました。ゴルフサークルのこと、大学院に進学して哲学を研究したいこと、教員になりたいこと、文武両道をモットーとしていること、など、熱く語ってくれました。久しぶりに若い友人に出会ったような、清々しい思いをもって、彼の申し出を受け入れたことを覚えています。年末に彼の下宿に招かれ、彼の部屋でゴルフサークルの学生たちとコンパをしたのも、本当に楽しい思い出として、その楽しさが今も心に残っています。彼がいかに面白い人物であったか、誠実な人物であったか、私が死後一周年に記念出版された『青春の軌跡―渥美貴文君のこと―』という本に寄せた文章

から抜粋してみたいと思います。なお、この本は本学の図書館においてあります。

「君は大吃らいの渥美であり、悪いことをするにも善いことをするにも、必ず、メンバーの一人になっている頼もしいやつであり、二浪の渥美であり、レスリングの渥美であり、試合中は恐いほど真剣になった渥美であり、目を輝かせて春歌を歌っていた渥美であり、いたずら好きの渥美であり、いつも友人のタバコをねらっていたしまり屋の渥美であり、楽しい先輩であり、朝寝坊の渥美であり、他人への思いやりのある渥美君であり、わがままな所もあった渥美君であり、三好課長をパンツ一つにしてレスリングした渥美君であり、グラウンドを黙々と走っていた渥美君であり、「誠実な努力」「闘魂」を座右の銘にしていた貴文であり、バラの花をこよなく愛した貴文であり、姉妹思いの貴文であり、永遠のライバル貴文であつた」。

私自身、グラウンドを黙々と走る渥美君の姿を鮮やかに覚えています。彼は本当に真剣にスポーツと勉強に取り組んでいました。小柄でしたが、ギリシャ彫刻のような整った目鼻立ちをしており、目が大きく日本人ばなれた男振りでした。ハンサムで楽しい性格の貴文君をご両親がいかに愛していたかがわかります。ゴルフは、開業医であつたお父さんの手ほどきを受け、全日本ジュニア選手権にも出場した輝かしい経歴を持っていました。

ところで、私は、渥美君の交通事故と死、葬式という悲しい時の流れに、全く関わりませんでした。事故の翌朝、事故のことを知らず、台湾へ旅立ち、何週間か滞在して帰ってきたからです。帰ってきたときには、全てが終つていました。しかし、彼が亡くなつてから、彼の仲間たち、ご家族とのかかわりが、はじまりました。渥美君の仲間たちは、実にいい人たちでした。大阪の自宅での葬儀に大きな体育連絡会旗を持って参加した三十名ほどの学生の多くが、そのまゝ渥美家に何日も泊まり込み、少しでもご家族を慰めようと毎晩の宴会をやつて、宴会芸で笑わせたということです。一九八一年一月十四日、渥美貴文君の死後一年を記念する集会在四国学院のセミナーハウス積集館で行なわれました。私はこの時に、彼らの宴会芸を、はじめて体験しました。実に楽しく、大阪から参加されたご家族、高校時代の友人の皆さんも、心から笑つて楽しみ、打ち解けることができました。

この会に参加した彼の仲間のなかには、渥美がつくつたゴルフサークルを潰すなということ、四年生になつてゴルフ

フサークルの部員になって支えてくれた人が何人もいました。

ゴルフ部を残したいという思いは、ご家族も同じで、お父さんとお姉さんのご主人がゴルフ部の名誉コーチになり、忙しい中、毎年秋、ゴルフ部のコンペと総会が開催される際には、善通寺に来てくださり、現役部員を指導してくれました。初期の十年ほどは、現役部員が春に新入部員を連れて大阪に出かけ、指導していただくのが、恒例行事となっていました。そのような真剣な取り組みの中で、歴代の三人の女子部員が、中国四国地区で個人優勝し、全国学生ゴルフ選手権に出場した輝かしい業績をあげることができました。

これは、渥美君の仲間たちが、彼の死後の困難な一年を支えてくれたお蔭でもありました。また彼のお父さんが、事あるごとに部長や部員たちに、便箋十枚以上に、びっしりと書き込まれたお手紙を送ってくださり励ましてくださったお蔭でもあります。ゴルフ部は数年前に現役部員がいなくなり、休部状態になっておりますのは、誠に残念なことです。

私は、渥美君との一年間の二十七倍の時間を、彼の仲間とのふれあいの中で過ごしてきましたが、渥美の友達とは、本当にすごいと思います。それは、彼らが、毎年、渥美貴文君を記念する会を開催し、お父さんをはじめご家族との交流を持ち続けたことです。大学を卒業して二十六年間、毎年です。そして、七回忌など、節目の法要には、多くの卒業生が集ります。昨年営まれた二十七回忌にも、十名の友達が集ってくれました。遠くは高知、松山からわざわざ大阪のご両親の家に出かけてくるのです。勿論、宿舎をとって、泊りがけです。この変わりのない律儀さは、何なんだろうと五十歳を間近に控えて髪の毛に白いものが混じるようになってきたなつかしい顔を見るにつけて思います。そして熱いものがかみ上げてきます。

私たちは、前途有為の若者が、突然亡くなったとき、この死には、どういう意味があるのですか？と、途方にくれてしまいます。勿論、今でも、わかりません。私と渥美貴文君との交流は、一年間にも満たない短い時間でしたが、彼は、私が四国学院大学で出会った学生のなかでも、本当に将来性のある素晴らしい学生でした。何故、このような若者が突然亡くなってしまったのか？本当にわからないのです。ただし、今、理解できることがあります。それは、今日の聖書の箇所をふまえて理解できることです。

「よくよくあなたがたに言っておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかしもし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。自分の命を愛する者は、それを失い、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至るであろう」(ヨハネ十二章二十四節)。

青春の真つ只中で旅立つた渥美君は、まさに一粒の麦であります。彼が死んだことにより、友人たちは心を一つにし、ご家族を支え、その交わりは豊かな実を結びました。彼は今も友達の心の中に生き続け、友と語り続けています。一年後輩の卒業生が渥美先輩は、こう言って励ましてくれました、と言って、彼とのエピソードをまるで昨日の出来事のように話す姿を見ると、本当に渥美君は、この友達の中に生きているなと思います。つまり、亡くなった渥美君が私たちの交わりの中心にいるということ、それは、理解できます。

そして、青春を駆け抜けた渥美君は、いつまでも純粋な青年のままであり、ともすれば、世の中で汚れていつてしまふ、私たちの永遠のライバルでもあります。少なくとも、自分たちが歩んできた青春の軌跡と彼の青春の軌跡が交わる眩い輝きを思い出すことによって、私たちは、汚れてしまわないで生きていこうよと、もう一度、自分に立ち返ることができます。私は、各自、自分なりのゆずれないテーマをもって、社会のそれぞれの場所で頑張っている、もうすぐ五十歳になる若者たちを見るたびに、渥美もすこかったけど、君らもすこいよ、と声をかけてやりたくあります。皆さん、どうか、この青春のキャンパスで素晴らしい出会いをしてください。ゆずれないテーマをもって、人生を切磋琢磨する友を見つけてください。

最後に、昨年(二〇〇六)営まれた二十七回忌の際に、渥美貴文君のお母様から、渥美君を記念する奨学金を四国学院大学に設けるための基金を提供したいとの申し出がありました。お母様は、最愛の一人息子を亡くされた悲しみのなかで、油絵に精進され、今では、有名な画家になつておられます。絵画活動のなかで少しずつ蓄えられたものを基金としたいということで四国学院大学に多額の寄付をいただきました。おそらく、今年中に、お母様の願い通り、渥美貴文記念奨学金として発足すると思います。これは、今、申し述べましたような、渥美君の友人たちの変わらぬ愛と誠があつて、はじめて実現することであること、また亡くなった一人息子に対するご両親の深い愛の証であること、渥美貴文君

が亡くなったことが、はじまりであったことを銘記したいと思います。

【後記】

本稿は二〇〇七年六月五日、チャペルで話した内容に手を加えたものである。

渥美貴文記念奨学金は、発足の経緯から、人文学科の二年生、三年生のうち①哲学・倫理学コースの成績優秀かつ勉強意欲が高い学生、②向上心を持ち、勉強以外の面においても、優れた働きをしている、特色ある学生各一人に対して支給することとしている。二〇〇七年の大学創立記念日に二名の学生が受賞して以来、すでに計六名の学生が渥美貴文記念奨学金の恩恵を受けた。幸いなことに、二〇一〇年四月、渥美貴文君のご母堂、お姉さん夫妻、妹さんと貴文君の姪の五名が四国学院大学を訪れ、末吉学長を表敬訪問され、渥美貴文記念奨学金に対して、さらなる基金の寄託をいただいた。ご両親、ご家族の変わらぬ熱い想い、ご配慮に感謝である。四国学院大学では、二〇一〇年四月にメジャー制度が発足し、さまざまな分野にチャレンジする新たな可能性を持った学生を世に送り出そうとしている。一人でも多くの学生が渥美貴文君の志を継承し、渥美貴文記念奨学金の恩恵を受けることを期待したい。